

Title	日本古文化研究所報告 第四 近畿地方古墳墓の調査 上野國總社ニ子山古墳の調査
Sub Title	
Author	保坂, 三郎(Hosaka, Saburo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.2 (1937. 6) ,p.158(322)- 159(323)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370600-0160

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

養嗣子となり家業を承けて農の傍木綿問屋を營み、菊間藩主水野出羽守の用達を務む。又國學者村上忠順に就いて皇學並に和歌を研鑽し、勤王敬神の念夙に篤く、天誅組の義舉に給資し、敗戦するや、其の志士等四十餘名を庇護す。文久以來、有栖川宮の密旨を奉承して金品を獻じ、熾仁親王東征大總督として東下の際岡崎に出で奉迎し、其の頃尾參間に奔走して志士を糾合し赤心・報國等の諸隊を編成し、親王の西上に際しては一族と共に隨從し、歸國に際しては特に謁を賜ひ、御懇命を拜す。篤慶、歸郷の後は敬神興學の事に私財を投じ、又岳父忠順の爲め古書珍籍を蒐集して「千巻廻舍文庫」を創設し、或は國學和歌の書を上梓し、郷土の教化に力む。明治十四年三月二十五日病歿、年五十四。後大正二年十一月十七日、生前の功を追賞あらせられて從五位を贈らる。

篤慶妻愛子は忠順の女にして内助の功多く、晩年史談會の請に依り數回、夫君篤慶、父忠順その他一族の維新に於ける國事奔走の事歴を談じて居り、これは印行の史談會速記録に記載され貴重な維新史料である。昭和十二年三月（武田勝藏）

● 知恩院 史（知恩院定慶編）

法然上人の立教開宗以來七百六十餘年間、法燈燐然として輝く洛東の一大伽藍たる華頂山知恩院門跡に於ては、今次、祖徳顯彰の遠忌大法會を機會に知恩院史なる大書を上梓頒與せられた。

本書は之れを四篇に輯み、第一篇に知恩院の法脈傳燈を悉記し、第二篇に宮門跡創設前後よりの皇室關係を謹述し、第三篇に文化

史上に於ける知恩院の位置を詳記し、第四篇に年表を掲記し、開祖と歴世の略歴、知恩院の重要事項を摘記し、宗勢寺運の消長を一目瞭然たらしめ、第五篇に本論に使用せざるものにして、研究上必要と認められたる文治二年より明治十四年に至る参考資料を輯錄する。又挿入幾多の圖版は本論引用資料と共に讀者をして一層院史を了解せしむるものがある。

終に本史編纂主任井川學士以下の筆労に敬意を表し、この新刊を紹介し、又同宗宗運の益々隆昌ならむことを祈るものである。
昭和十二年三月（武田勝藏）

日本古文化研究所報告 第四

近畿地方古墳墓の調査 上野國總社二子山古墳の調査

日本古文化研究所報告第四として近畿地方古墳墓の調査（梅原末治氏）と上野國總社二子山古墳の調査（田澤金吾氏）の二報告が併せて上梓せられた。前者には

河内四條畷村忍岡古墳

攝津萬籠山古墳

丹波篠村樹塚古墳

近江和邇大塚山古墳

近江安土瓢箪山古墳
伯耆下北條の一古墳

伯耆八尾甕棺遺蹟

攝津福井海北塚古墳

備前行幸村花光寺山古墳

等の十基を含み、此等は何れも古墳墓研究上各々重要な位置を占めるものであつて、茲にその全般に亘る紹介は紙面のよく費し得ない所である。二三述ぶれば棺臺側面に格狭間を有する河内御嶺山古墳、豎穴式石室の完存する攝津萬籠山古墳、伯耆下北條出土の鹿埴輪等極めて興味深いものがある。特に近江安土瓢箪山古墳にあつては後圓部に墳の主軸に直角の方向を取つて三個の細長い豎穴式石室があり、更に又前方部に二箇の箱式棺のあるといふ極めて複雑な構造を有する前方後圓墳であるが、是等の配列はそれゝ秩序があり相互の密接な關係が察せられ、或は家族墓の性質を示すものと述べられてゐる。誠に豎穴式石室の構造に確實な一大資料を提供せられたと云ひ得べく、學界に未解決の前方部の性質を考へるにも亦重大なる資料といはねばならぬ。攝津福井海北塚古墳に於ては石室内遺物出土状態の特異性及び出土鏡の傳世品なることを注意せられ、『豎穴式石室を中心とする本墳の營造が成つて後に、古い傳世品を更に奉獻的な意味で其の封土の一部に埋めたとする推測を加へしめることになる』と。これは注目すべき新事實と云はねばならぬ。備前行幸村花光寺山古墳は長持形石棺を有するものであるが、その石室の性質により同式棺を内容とする古墳系列中それが比較的後期に位するのを思はしめると斷定せられてゐる。遺物としては二面の銅鏡と銅鏡とが特に注目される。後者の田澤氏によつて調査報告せられたる上野國總社二子山古

墳は徳川時代より既に注目せられた著明な前方後圓墳であつて、『封土の南側に廣壇を有し、且つ後圓部并に前方部の双方に横穴式石室を有せる特殊の制式に成り、その特徴中(一)封度外形が前後の高さ相等しく二子山式であり、且つ石室が横穴式にして南面せることは前方後圓中の新式に屬するものであり、(二)石室の構造に於て主室に胴膨みを附し或は石室を切石造となせる等は、上代末前に盛行せる手法である、(三)又遺物中コ形勾玉は上代末或は奈良朝頃の遺物と推定せらるゝものである。と述べられ、本古墳の營造年代は上代末頃を距ること遠からざる時期と断定せられてゐる。

古來東國上毛の地は特殊なる文化地域として重視せられてゐるのであるが、その研究未だ畿内の如くならざるに、ここに本古墳の全貌を明示せられたことは感謝に堪えない。

我々は幾多の古墳が年々破壊せられ、古人の名句を如實に感ずるのであるが、かゝる報告書が公刊せられることは學界に新資料を提供するといふ意味に於てのみならず、後世に資料を遺存せしめる意味に於ても益多かる可きことはここに多言を要さざる所である。(保坂三郎)

文祿慶長の役

(池内宏行著)

著者は南滿洲鐵道株式會社歴史調査部の一員として、すでに早くより文祿慶長の役の研究に志し、大正三年その研究の一部を公刊して好評を得たのである。此戰役は國史上に於て非常に重要な